

# ドクター内田のジャズ古本

~B~

これはもちろんジャズに限ったことではないけれど、音楽に興味を持って初めてレコード店に行った時、接する売り手の姿勢や熱意、そして人柄によつて、買ひ手の音楽的好みの行方や深さが大きく左右されるのではあるまいか。その意味では、僕はすばらしく恵まれていた。

初めてジャズを通じての友達となったOKストアの若い店主さん。それに続く神田リズム社の村岡さん、この方は当時アメリカで最も内容の充実したジャズ専門誌「メトロノーム」のアジア地区通信員をつとめたり、世界中のジャズに関する資料を、雑誌に論評を加えながら紹介し続けたほどの博識な人で、時には見事な英文の手紙をもらつて面くらつたりした。いわば別格だったかもしれないが、

だが村岡さんにはきあと出会つた各地のレコード店の主人

たちも、名物オヤジと呼ぶにふさわしい傑物ばかりだった。生前、二度岡崎までお訪ね頂いた、大好きなエッセイスト植草甚一さんは、六十歳近くなつて突然ジャズファンとなり、次々にユニークな評論を書かれたことで有名だが、その植草さんのジャズ開眼に少なからぬ影響を与えた新宿マルミレコードの鈴木さん。故人となつた彼が病で店を閉

じる時、岡崎までやつて来て、トラック一杯分のSPレコードを差し上げたいと申し出られたのは仰天させられた。またメジャーの会社が出た「ブルーノート」などには自

## 名物オヤジに育てられて……

販売を一手に引き受けた大阪の「シンセイサービス」のオヤジさんは、僕が一九六四年に初めて二カ月間の海外旅行を企てた時、五百円の外貨制限で困つているのを知つて、

てくれ、上方商人のど根性を見せてくれた恩人でもあつた。そうだが古屋にも忘れてはならぬ人がいる。新築の「小池レコード店」と言えばマニアなら知らぬ人もいないはずだが、何せお客にレコードを見せる前に、少なくとも一時間は音楽談議をしなければ気がすまぬという楽しい人で、その体験を懐かしく思い出される方も多かるう。元々クラシック演奏家との広い交友で知られるが、中年を過ぎてなぜかジャズにも熱中するといふ柔軟さで、戦後間もなくから今や数百回に及ぶ自前の「国際レコードコンサート」は、視野の広い内容で、まさに脱帽といった感じなのだ。残念ながら今ではレコード産業もビッグビジネスと化して、こつした名物オヤジが影をひそめつつあるのは、ちょっと寂しいことだけれど。おつとお話を本筋にもどそう。「ホットクラブオブジャパン」の幹事役としての村岡さんのお誘いで、それから間もなく東京新橋の蔵前会館での月例レコードコンサートに出席したが、その席で副会長の野口久光さん、当時はまだ神戸在住で、その日久しぶりに顔を出したという油井正一さん、同じ学生ながら、すでにジャズ評論を書き始めていた大橋巨象、いソノてルオといつた人たちに初めて紹介され、どうやら我らの「ナゴヤホットクラブ」も中央とのパイプが出来ることになつたのだ。(内田 修)



岡崎にドクター内田を訪ねたこともあつたジャズファンの故・植草甚一さん